

新横須賀市史 通史編 近世 目次

凡 目 序
例 次

序 章 一

横須賀市域の近世

第一節 時期区分と地域の特徴 三

時期区分 地域 本書の構成 五つのグループ

第二節 本書の内容 六

近世社会の成立と展開 浦賀奉行所と浦賀湊 浦賀湊の流通と商人
半島の往還と継立場 半島の暮らしと生業―農村と漁村― 浦賀の町の生活
地域の文化と信仰 海岸防備とペリー来航
幕末の三浦半島―横須賀製鉄所の建設―

第一章 二五

徳川家康の関東入国と三浦半島

第一節 検地と知行割り 一七

小田原北条氏の滅亡と徳川家康の関東入国 天正検地 彦坂元正の検地と年貢高
知行割り

第二章 壱

江戸時代前期の領主と村々

第一節 領主の変遷	壱
軍事的要地としての三浦半島	
江戸時代前期の所領配置	
元禄の地方直し	
第二節 村の構造	二
村と村高の変遷	
佐原村の概要	
寛文八年「人別帳」	
一七世紀における佐原村の家々の系譜	
第三節 浦賀の原型	三
文禄三年の浦賀郷	
文禄段階における浦賀村の海岸線	
西浦賀地域の耕地と集落	
田中町から高坂へ	

第二節 文禄検地と長谷川長綱	二
----------------	---

文禄検地 長谷川長綱と浦賀

第三節 三浦按針と対外関係	三
---------------	---

ウィリアム・アダムズ	アダムズ、日本に來航	家康の謁見と浦賀との関わり
外交顧問としての活躍	逸見村とアダムズ	スペイン外交と浦賀湊
浦賀のアダムズ屋敷と修道院	船奉行向井氏とアダムズ	
貿易の隆盛から鎖国の時代へ	アダムズの死と按針塚	
変貌する按針様のイメージ		

コラム

第四節	東西浦賀村の分割	九四
-----	----------	----

元禄五年の東西浦賀村への分割
東西浦賀村の地理的特性
番所の移転と東西浦賀の変容

第五節	内川新田の開発と展開	一〇三
-----	------------	-----

三浦半島における新田開発
内川新田の開発
砂村新左衛門
内川新田の概要
二分された新田
新田の維持をめぐる諸相
その後の内川新田

コラム	夫婦橋の掛替え費用	一七
-----	-----------	----

第三章 二九

浦賀奉行所の成立と機構

第一節	浦賀奉行所の成立	一二
-----	----------	----

下田番所の設置と三崎番所・走水番所
浦賀奉行所の設置
浦賀奉行所の職制
三方問屋の役割
水主役

第二節	浦賀奉行所の機構と機能	一七
-----	-------------	----

浦賀奉行所の機構と機能
浦賀役所
浦賀番所と船改め
江戸役所とその機能
三崎役宅
下田用所と難船処理
浦賀奉行所の記録管理
「浦賀史料」と浦賀奉行所

第三節	役知と預所	一四六
-----	-------	-----

役知・預所とは
役知村々・預所村々の変遷
諸役負担のあり方
預所と幕府勘定所
天保一二年不作をめぐる勘定所とのやりとり
年貢の納入

第四章 二六

浦賀湊の成立と発展

コラム 浦賀奉行とその知行所 一五八

第一節 江戸時代の浦賀湊 一五三

徳川家康の関東入国 菱垣廻船荷物の入津 水揚商人仲間と諸国廻船の入津
幕末の浦賀湊と物資流通 横須賀市域の湊の船数

第二節 浦賀湊での物資流通の諸相 一七六

水油をめぐる浦賀商人と江戸問屋 塩の流通と浦賀湊
知多半島の醸造業と大豆の移出 小麦の集散と浦賀湊
東京湾で獲れた海鼠の輸出

第三節 江戸時代後期の地域流通の様相 一八七

幕末の東京湾沿岸地域の湊 江戸で集散した物資
武蔵国久良岐郡町屋村の古記録から 川船役所と浦賀湊の船 浦賀湊と片瀬湊
コラム 江戸湾という地名はなかった 一九八

第五章 二二

湊の商人

第一節 東浦賀千鰯問屋の歴史 二〇三

東浦賀千鰯問屋の成立 千鰯問屋の営業認可をめぐる

第六章 三

三浦半島の道と交通

東浦賀干鰯問屋の再興に向けて	干鰯入荷の方法と干鰯問屋の変遷
干鰯入荷量の変遷と鰯の不漁	干鰯問屋飯塚屋の経営
干鰯問屋再興をめぐる事件	天保改革と干鰯問屋
第二節 水揚商人と小宿の活動	二九
水揚商人仲間の結成	東西浦賀村の水揚商人
三浦半島の海防と水揚商人	小宿と尾州廻船取締会所
コラム 水揚商人の家に伝来した写本	三六

第一節 人馬継立役・水主役と渡船場	二三
半島の道・海の道	人馬継立役の村々と組合
渡船場の村々	役水主の村々と組合
第二節 大通行時の負担と三浦半島	二四七
社参・上洛・来聘	享保と安永の日光社参
天保の日光社参と浦賀警備	寛延朝鮮通信使と三浦郡
將軍家茂の上洛と浦賀	
第三節 助郷負担の拡大	二六三
鎌倉雪之下村助郷	金沢町屋村助郷
海防と東海道助郷への拡大	
コラム 横須賀村 ―陸の道・海の道―	二七五

村の人々

第一節 村々の諸相	二七九
-----------	-----

変化に富んだ地域 支配の多様性

第二節 三浦半島西側の村	二八一
--------------	-----

―秋谷村若命家文書を中心に―

秋谷村の村況 支配の変遷 街道の道橋普請 安政三年の大風雨被害

村役人の制度 若命家と秋谷村 風俗の乱れと取締役の設置

生活の変化と天保改革 秋谷村と組合村 郡中村々の議定で番屋を設定

水戸浪人らのねだり 村人の老い

第三節 武山丘陵南麓の村	二五八
--------------	-----

―須軽谷村鈴木明家文書を中心に―

須軽谷村の村況 御林のある村 支配の変遷

浦賀奉行役知・預所村々の組合村制 役知村々の年貢納入 その他の負担

川越藩への支配替えに村々が反対 たび重なる自然災害 人々の生と死

第四節 三浦半島中央の村	三〇八
--------------	-----

―衣笠村大塚家文書を中心に―

元禄時代の衣笠村 文化期との比較 支配の変遷と旗本鈴木氏の知行所支配

会津藩支配と万民安穩の祈禱 会津藩主の少将叙任と村々の負担

松平容衆と家斉娘元姫の縁組 文化一三年の暴風雨災害 衣笠村の子どもたち

第五節 日記が語る村の暮らし	三七
----------------	----

―大田和村「浜浅葉日記」の世界―

「浜浅葉日記」の性格 浜浅葉家の経営 農業暦 商品作物の販売―綿と米―

村の遊び日 村の事件 村を訪れる人々 浜浅葉家の金貸し

第八章

三

漁場と暮らし

コラム 元禄・宝永・安政地震の被害……………三八

第一節 内海と外海の恵み ―多様な魚種―……………三三

海の中はいつの時代も同じか 天保期の内海魚種・嘉永期の外海魚種

第二節 魚を運ぶ ―三浦半島内外の産物と流通―……………三九

「地産地消」される地域の生産物 江戸城御膳御用の新肴場問屋と付浦

流通ルートと海産物

第三節 漁場争論はなぜ起こる……………三四七

文化七年鯉・鮪争論の実態と背景 イワシ漁さまざま―漁法と漁師の移動―

第四節 地域独特の漁業……………三五六

特徴的な見突漁と小漁職 内水面の漁撈 漁業としての海藻肥料採集

第五節 捕る・釣る ―船と漁具のいろいろ―……………三六二

新規と「古来」の漁法 網漁・釣漁の道具 漁業の船いろいろ

第六節 食文化の広がり……………三七六

浦賀町人の味覚と村の食事情 「河野松之助懐中覚」は語る

ペリ―来航と和食料理人 幕末維新期の新食材

コラム タコを捕り、石を運ぶ漁師たち……………三八五

第九章 三七

湊町の人々

第一節 浦賀の今昔 三八九

人口と出身地 浦賀事跡考

第二節 浦賀の人々の生業と地域性 三九七

東浦賀村の住人構成 西浦賀村の住人構成

第三節 湊の維持・管理 四〇七

浦賀湊 湊浅い 天保一三年湊浅いと築地新町の成立 湊は誰のもの

第四節 浦賀の賑わい 四一八

衣食住と湯屋・髪結 旅人宿と料理屋 東浦賀の寄席

「洗濯屋」と盛り場の形成 洗濯女と酌取女

コラム 西浦賀の町並みを眺望する 四二四

第二十章 三七

地域の文化

第一節 三浦半島の文人たち 四三九

学問と教養の担い手 初等教育の普及 「近世浦賀崎人伝」の文人たち

第二節 俳諧・文芸の興隆 四四七

俳句をめぐる人々の交流 与力中島三郎助の学問と文芸

第二章 咒

地域の信仰

第三節 変革期の社会 四五六

風俗を糺す取り組み 地域医療を担う医師たち 流行病の発生と社会

第四節 旅と娯楽 四五六

江戸時代の旅 伊勢参宮と西国道中 祭礼・芸能興行

コラム 相州海岸に詰めた彦根藩医の記録 四七九

第一節 三浦郡の神社 四八三

寺院の組織化と宗派構成 神職や修験の組織化

第二節 寺院の組織 四八八

寺檀関係と半檀家 寺院の維持 真宗にみる寺院組織の変容

第三節 信仰の競合と併存 四九六

高野聖の檀那廻り 神祇不拝をめぐる事件 朱印地の用益と地域社会

第四節 神社支配をめぐる競合関係 五〇八

神社と別当 秋谷村の真言宗寺院と神職との争論 争論の経過

延命寺末寺と神社

海防の最前線

第一節	海防意識の高まり	五七
	海防意識と鎖国観念	
	寛政改革と海防問題	
	異国船の来航と海防政策の画期	
第二節	文化期大名駐屯体制の成立	五〇
	露英異国船二つの事件	
	大名の駐屯体制と会津藩	
	会津藩の海防動員体制	
	触継・駈着・台場詰め	
第三節	文政期の浦賀援兵体制	五四八
	英商船ブラザース号の来航	
	浦賀援兵体制と川越藩・小田原藩	
	小田原藩の援兵陣立て	
	異国船打払令	
第四節	海防強化と天保改革	五四九
	モリソン号事件と内憂外患の時代	
	鳥居耀藏と江川英龍の海岸見分	
	鳥居と江川の海防構想	
	天保改革と海防体制の改編	
	大名駐屯体制と伊豆援兵体制	
第五節	弘化・嘉永期における海防体制	五七
	阿部政権とビッドル艦隊シヨック	
	弘化期の四藩駐屯体制と彦根藩	
	浦賀奉行所の改革	
	洋式軍艦導入問題	
	御国恩海防令	
	ペリー来航前夜	
コラム	「相州御固図記」の世界	五六

第二章 航

ペリー来航

第一節 浦賀来航	二〇一
----------	-----

ペリー来航までの経緯 セカンド・ガバナー中島三郎助
ガバナー・オブ・ウラガ香山栄左衛門 知らされなかったペリー来航情報
ペリー艦隊の沿岸測量 大統領国書受渡しの地は久里浜にて

第二節 久里浜上陸	二〇七
-----------	-----

応接の絵図 ペリーの行進 応接所での面会
ペリー艦隊の江戸内海侵入と退去 ペリー艦隊の再来航

第三節 行きかう黒船情報	二一〇
--------------	-----

吉田松陰の書翰 北条源蔵の「浦賀日記」 佐久間象山の書翰
加賀藩士泉沢弥太郎の情報

第四節 庶民が見たペリー来航	二一六
----------------	-----

「浜浅葉日記」にみるペリー来航 藤間柳庵の「太平年表録」 鈴木藤助の日記
萩園村和田篤太郎の日記 狂歌の流布

第三章 幕末維新期の三浦半島

幕末維新期の三浦半島

第一節 開国と三浦半島	二四九
-------------	-----

鳳凰丸建造に至る経緯 鳳凰丸の建造と品川回航
長崎海軍伝習と浦賀奉行組与力・同心 咸臨丸のアメリカ派遣

浦賀の艦船修復場 横浜開港後の海難事故 横須賀村での外国船修復

第二節 横須賀製鉄所の建設 六六

蒸気機関設立の計画 フランス公使レオン・ロッシュと勘定奉行小栗忠順
ロッシュによる造船所建設の助言 日仏の約定書 製鉄所工事の開始
フランス人居留区 ドックの建設 技術学校の設立 ドックの開業

第三節 旧体制の崩壊 六九

徳川慶喜追討令 三浦半島からみた戊辰戦争 奉行所役知村々の支配替え
横須賀製鉄所の接収 浦賀奉行所の接収 最後の奉行土方勝敬と与力中島三郎助
神奈川裁判所に支配替え

コラム 万延の遣米使節団と横須賀製鉄所 七〇

掲載図版一覧 七二

参考文献および史料集 七九

近世横須賀略年表 七四〇

浦賀奉行一覧 七五〇

近世三浦郡寺院・神社・仏堂一覧 七六

あとがき

執筆分担

史料提供者・協力者

横須賀市史編さん関係者名簿

『新横須賀市史』発刊計画(全二五卷)

索引